

編集後記

「部落解放研究」十号をお送りする。はや十年である。この激動の年月に、部落差別問題を軸とする現実分析・批判として、現実乗り越えの指針として、さらに現代思想への問いかけとして、本誌がどれほどの役割を担うことができただろうか。執筆者には力作を寄せていただいた。その上で、本誌にできたこと、できなかったことを顧みている。

本号も内容多彩である。小森論文では、十号に寄せて、現代の思想的総括と研究所の課題を提起していただいた。本誌の位置と使命をあらためて確認するところである。宗教会から、「国家を問う」の対談報告をいただいた。そして、ハンセン病訴訟原告の生活史の語りを中心に、国家・宗教・人間につき議論をいただいた。国家と向き合う個人の主体をどう確立するかを、三者の思想のなかに読むことができよう。グローバリゼーションが席捲する現代日本の問題に二本の論文が迫った。山口論文では、野宿者の生き抜く闘い（廃品回収）が分析された。隠蔽された野宿者の労働世界を描いた貴重な論文である。青木論文では、外国人労働者をめぐる理論的課題が提起された。さらに、差別を問う論文を三本寄せていただいた。

国際部会から、水越論文を寄せていただいた。ここでは、フイリピン女性の被差別境遇が批判的フェミニズムの立場から分析された。教育部会から、久保田論文を寄せていただいた。ここでは教育社会学から、被差別部落児童・生徒の学力の規定要因が分析された。氏も述べるように、さらに児童・生徒の被差別状況に照らした検証が必要となろう。嬉しいことに、教育部会が実質動き始めた。歴史部会から、政平論文を寄せていただいた。ここでは、水と苦闘し、水と生きる部落の人々の足跡が明らかされた。先人たちの差別と生活の苦難と、闘いの必然の一歴史を読むことができる。

本誌は、元来二本の柱から成る。一つ、研究所の部会活動を基盤とする日常の研究成果を集約すること。二つ、現代の思想状況を撃ち、私たちがどこにいて、なにをなすべきかを問うこと。次の十年、執筆陣の輪を広げ、編集機能を強化し、広島の地から、ますます批判的・創造的な問題提起が発信できるよう、奮闘したい。

(A)